



**冷戦終焉期の日米関係**  
 分化する総合安全保障  
 山口航・著  
 吉川弘文館 / 9900円

## 米国の優越は終わった。 では、日本の役割は

米国の衰退が語られる現在、われわれは秩序の転換期にいる。一九八〇年代の日本外交も、激動する国際環境——米国の衰退と米ソ対立の再燃、そして冷戦終焉——に直面していた。この時代に、太平・鈴木・中曽根の三政権が掲げたのが「総合安全保障」という概念だ。本書は、この概念が多義的に語られつつ、継承された過程を丹念に描き出す。この頃から、自助のみならず、国際環境の安定にも寄与しようとした日本外交の意外な姿。

歴史上まれな速さで経済成長し、世界大の発言力を強めてきた一九〇もの新興国。本書は理論・データを駆使し、各国の経済発展、社会福祉、政治体制が多様かつ複雑な経路で構造変化しており、世界秩序も米国を中心とする自由主義的国際主義と、中口の国家主義的自国主義の対立に収斂するほど単純ではないことを浮き彫りにする。前者の申し子である戦後日本には、新興国との関与で何が必要かも、本書は問いかける。

## 自由・民主か専制か 二元的世界観を超えて



**新興国は世界を変えるか**  
 29カ国の経済・民主化・軍事行動  
 恒川恵市・著  
 中央公論新社 / 946円

## ロシアのお雇い兵士が見た 存在しない軍隊



**ワグネル**  
 プーチンの秘密軍隊  
 マラート・ガビドゥリン・著 /  
 小泉悠・監訳 中市和孝・訳  
 東京堂出版 / 3250円

ロシアのウクライナ侵略に投入されていると言われる民間軍事会社ワグネルの傭兵であった著者が、二〇一五年の、シリア内戦での戦いの記憶を赤裸々に語る。多くの戦場でワグネルは主力であり、著者にとって傭兵という仕事は生きがいそのものであった。だが、その存在は決してロシア政府に認められることがなかった。戦場での暗躍が伝えられる傭兵の苦悩と葛藤の実情は、ウクライナ戦争の行方を考える上で貴重な示唆を与えている。



現地取材 400日で見えた  
検証 **ウクライナ侵攻10の焦点**  
朝日新聞取材班・著  
朝日新聞出版 / 1870円

## 記者の目、組織の力で 戦争の「真実」を描く

例えば戦争犯罪だ。拷問された遺体を前に人々がもたらす悲痛な叫びを記者たちは見逃さない。虐殺が行われたブチャへは繰り返し訪れ、遺体収容担当者の心身の変化をも記す。記者たちは様々な現場に渡りウクライナ人の嘆き、ロシア人の葛藤を掘り上げ、戦争の実態をより詳細により正確に炙り出す。組織ジャーナリズムの特徴である多様性と継続性が膨大な事実を積み上げ、この戦争の全体像を包括的に明らかにするのこそを可能にした。

## 争いの連鎖を 止めるには 勝利より 双方の満足を



**どうすれば争いを止められるのか**  
17歳からの紛争解決学  
上杉勇司・著  
WAVE 出版 / 1650円

なぜ、争いは起きてしまっただけなのか。どうすれば争いを止められるのか。世界では紛争が絶えず、今この瞬間も争いによって尊い命が失われている。本書では、国際社会における紛争の原因やその解決策を考える紛争解決学の入門書として、それぞれの紛争に共通する点をシンプルに言葉で説明し、読者が紛争に対する知見を深めるのを助ける。実はその知識こそが、身近な社会レベルでも「争いに満ちた社会」を生き抜くためのヒントなのだ。

## 交渉だけが外交でなし 酒が支える日本外交

### 日本酒外交

酒サムライ外交官、世界を行く  
門司健次郎・著  
集英社新書 / 1012円



首脳や外相、外交官たちが会議室で自国の国益をかけて交渉する——多くの人が想起する外交のイメージだろう。だが、外交は会議室だけではない。会食の場で酒を酌み交わすことは、交渉者どうしが互いを理解し、外交交渉を円滑に進めることにもつながる。本書ではワインの本場フランス、禁酒のイスラム圏など、著者の外交経験と酒のエピソードが生き生き語られる。とにかく酒についての語り口が楽しい。酒好きにたまらない一冊。